

(別添)

世界の人びとのための J I C A 基金活用事業・業務完了報告書

1. 業務の概要：	
(1) 事業名	南アフリカ共和国：貧困地区の若者と家族の問題解決の道標となるライフストーリーブックの作成
(2) 実施団体名	ニバルレキレ～I am special!～
(3) 実施期間	2018年6月1日～2019年1月31日
(4) 実施国	南アフリカ共和国
(5) 活動地域	ハウテン州エクルレニ市エマプペニ・ボクスバーグ・カテエホン地区
(6) 活動概要	<p>①活動の背景：</p> <p>当団体ではこれまでに、①HIV/エイズ当事者や遺族・エイズ孤児・里親の個別の心理ケアと生活支援、②エクルレニ市の貧困地区住民とのコミュニティセンター（セチャバ・コミュニティケア）の運営、③薬物乱用防止と依存症治療のための啓発活動・治療施設との連携等を実施してきた。セチャバ・コミュニティケアは、貧困地区で人がつながりまとまったコミュニティが存在しにくい中で、エイズ孤児や失業中の若者や障がい者を中心に給食や学習支援、家庭訪問、学校や行政と連携しての子ども達のドロップアウト防止の活動など少しずつ事業を増やしながら活動している。</p> <p>エクルレニ市の貧困地区ではエイズ孤児や被虐待体験のある子ども達が多く見られ、若者全体が学業からのドロップアウト、HIV感染や性犯罪の被害者体験、薬物乱用等の危険を抱えている。家族も失業やトラウマ体験の中で子育てを十分にできていないことが多い。活動初期からのエイズ孤児達は思春期・青年期となり、学業継続やライフスキルを学ぶための細やかな支援が求められている。子ども達の養育・教育環境を整えることが大きな課題である。</p> <p>現在のスタッフ数で支援できる世帯数には限りもあり、より有益で裨益者が広がる活動が求められている。</p> <p>②活動の目標：</p> <p>本事業では貧困地区の子どもや家族に配布する冊子「ライフストーリー」を住民とともに作成する。「ライフストーリー」では、①児童期～青年期のエイズ孤児、②被虐待の体験児、③薬物依存から回復した若者、④HIV陽性者や障がい者、⑤彼らの家族や住民を対象に、1) 個別インタビューによる生活史の聞き取り、2) グループ討議での苦難の克服体験の共有、3) 社会資源探しと一覧作成を行い、これらの一つの冊子にまとめる。</p> <p>提案活動によって、①「ライフストーリー」の作成が参加した若者や家族にとって自己肯定</p>

感情を育み、互いに助け合う機会となること、②冊子がこれまで孤立していた若者や家族の手に届き、学業・就業の努力や家族関係の改善など、今後の人生の道標として活用されること、③一人でも多くの人が必要な社会資源につながることを実現したい。また支援者がコミュニティをより深く理解することを目指したい。

2. 業務実施結果：

(1) 実施した内容*

【実施内容 ①個別インタビュー】

インタビュー活動は、専任のソーシャルワーカーとアシスタントソーシャルワーカーを決めて行なった。

インタビューでは①ニバルレキレが長年かかわっている世帯、②セチャバセンターで個別支援や訪問活動につながっている世帯、③連携先のハウスオブメルシー（アルコール・薬物依存の治療リハビリ施設）の利用者と退所者、以上の中から48名から生活史の聞き取りを行った。許可を得られた場合には録音させていただいた。

具体的には、①エイズ孤児11名、②被虐待体験児5名 ③薬物依存症治療リハビリ患者と回復者11名、④HIV/エイズ陽性者・障害者13名、⑤支援対象者の家族8名となった。

聞き取りの際には、苦難の克服や自信回復、自己実現について十分に話してもらおう心がけた。2時間を予定した面談だが、信頼関係づくりのためにも訪問自体は1日を超える場合がほとんどであった。

【実施内容 ②ワークショップ】

ワークショップは専任のファシリテーターとアシスタントソーシャルワーカーを決めて実施した。6月～11月にかけて45回のワークショップを開催し、延べ612人の参加があった。図書館の会議室や集会所等4か所を利用。ワークショップの告知は学校やクリニックでの呼びかけの他、チラシを各家庭に配布して行なった。

ワークショップでは、(1)苦難を乗り越える体験の共有を行なうグループ討議の他、(2)参加者のエンパワメントを目的とした自己表現のワークショップ、(3)ライフスキルや社会資源全般について身につける体験型ワークショップなどを実施した。

①住民誰でも参加できるワークショップの他、②セチャバセンター利用の高校生（エイズ孤児）、③女性、④男性、⑤HIV陽性者、⑥依存症回復者、それぞれのグループを作りワークショップを開催した。

ワークショップでは、苦難の解決や回復体験を語り分かち合うと同時に、自分達がエンパワメントされるために必要な知識や行動について討議し共有した。

【実施内容 ③家庭訪問や個別ソーシャルワーク】

個別インタビューやグループ討議にて、個々の心理社会面の支援が必要と見なされた人のアフターケア（個別面談や家庭訪問等）を実施した。

セチャバセンターのソーシャルワーカーによる、2018年6月～12月のケースワーク（個別相談）件数は1143件である。一日平均で8件の事務所への来訪者への対応があった。それとは別に家庭訪問事業を毎日実施しており、これらの中に当活動でのアフターケアの件数は含まれる。

アフターケアでの支援内容としては、IDの取得、社会保障の申請、子どもの虐待への対応、エイズ孤児の里親になるための法的な手続き、自宅介護のためのリフォーム等を行なった。

長期的な支援としては、学業継続するためのサポート、就労の見守り、HIV陽性者の治療継続のサポートなども必要とされた。

【実施内容 ④社会資源一覧づくり】

南アフリカでは自治体がサービス一覧をまとめて住民に配布するサービスはなく、役所へ行った場合にも窓口がわかりにくい場合が多い。そのため当初は社会資源一覧のイメージを現地スタッフは抱きにくかった。そこで日本の自治体作成の「暮らしの手帳」や「福祉の手引き」を紹介し、参考にしてもらった。

活動ではセチャバセンターの実習生やエイズ孤児、薬物・アルコール依存回復者、失業者らとの協働作業で、地域にある社会資源をリサーチし一覧表を作成した。必要に応じて社会資源先に出向いて利用体験をした。その中で、社会資源としては、(1)社会保障一覧、(2)学業を続けるための情報一覧、(3)生活や心理面で問題が生じた場合の様々な相談窓口、(4)セチャバセンターのサービス に分類してまとめることとなった。

(1)社会保障は、ワークショップの中で困窮を訴えられている方には、もらえる権利がある手当を知らない世帯も見受けられた。特に障がい者や、エイズ孤児を養育している里親家庭に多かったため、一覧を作成することとなった。

(2)学業を継続していくことは非常に重要だが、①ドロップアウトや家庭の経済状況など様々な事情によって学業を続けられなかった人が、基礎から学び直したい場合、②高校卒業資格は取れたものの、大学へ進学するための方法や奨学金の情報がわからない場合、の2点がワークショップ参加の若者達の声として聞かれた。

そこで学び直しのできる学校を探し出向いて、先方の好意により体験授業を受ける等の活動を若者有志と行なった。

また、高校後の進学や技能訓練、それに伴う奨学金を得るには、インターネット上での学校等への登録や情報収集が欠かせない。パソコンスキルやインターネットのない環境の中で、立ち止まってしまう若者も多かったため、パソコンを無料で習えるNGOや、インターネット接続したパソコンが常設されている図書館などを調べ一緒に体験した。

(3)若者有志によるインターネット体験の中で、まずは(1)の社会保障を調べまとめていった。

次に、生活や心理面で問題が生じた場合の様々な相談窓口を調べる作業も行なった。具体的には、①各行政サービスの窓口②医療機関③生活全般や心のケアについて調べていった。③は具体的には、ドメスティックバイオレンスや虐待防止・HIV/エイズ当事者の支援・様々な依存症者への支援・自殺予防・鬱病など精神疾患の支援・レイプ被害者支援・トラウマ支援・生活習慣病者への支援・LGBT(性的マイノリティ)の支援などにグループ分けし、資源をまとめた。困窮者でも相談できるよう、なるべく多くのフリーダイヤルも掲載できるように努めた。

(4)セチャバセンターでは様々な住民のための無料サービスを提供している。行政への橋渡しもできるため、住民には気軽に活用して欲しいと考えている。そこで、ソーシャルワーク実習生や職場体験中の若者によるグループをつくり、センターが提供しているサービス内容について紹介する作業を行なった。

【実施内容 ⑤テープ起こしと編集作業】

インタビュー等のテープ起こしと編集、社会資源一覧の編集を、通訳者や学生の協力を得ながら行った。写真や図を使い、わかりやすい冊子となるよう心がけた。

作業は南アフリカと日本とでスタッフと若者ボランティアが分担して行なった。南アフリカでの作業は担当する人全員がテープ起こしは初めての作業であった。主にスタッフがテープ起こしを行い、ボランティアにパソコン入力作業を担当してもらった。ボランティアにパソコン習得を他の場面でも活かしてもらえればと考え、このような分担にした。

この作業は、日本での作業の比率が多くなった。

冊子に用いる言語だが、エマプペニ地区では日常会話はズールー語を話す住民が多く、公立学校の授業は英語で行われている。わかりやすさと、汎用性（支援者にも配布できる等）について話合った結果、中3レベルの英語で作成することとなった。そのため、【ズールー語→英語→簡易な英語】、あるいは【英語→簡易な英語】へと文章を編集しなおす作業が必要となり、活動前に想定した以上に編集作業は大変であった。

【実施内容 ⑥冊子の作成・印刷】

「ライフストーリー」と題した冊子を作成・印刷した。冊子の形とまとめるデザインを含めた作業は、得手不得手を鑑みた結果、南アフリカからの要望を聞きながら日本のスタッフが行なった。

セチャバセンターを利用するすべての人に冊子に参加して欲しいとの現地スタッフの思いから、センターに通ってくる保育園～学齢期のエイズ孤児達の絵画をデザインに入れた。

手に取り読み切ることができるページ数を約50ページと想定したため、48人のインタビューすべてを掲載することは難しかった。内容を吟味し、10人のライフストーリーを掲載することとなった。総ページは60ページの冊子が300部出来上がった。

【実施内容 ⑦ふりかえり作業】

「ライフストーリー」をもとに、スタッフ・ボランティア間でこれまでの活動の振り返りと今後のニーズの予測、配布について話し合いを行なった。

これまでの振り返りは、作成の苦労を改めてわかちあう時間となった。今後のニーズの予測としては、様々な苦難のうち、解決の糸口が一番見えずにいるものが失業の問題であり、ワークショップの中でも参加者から対応を期待されていることをスタッフで共有した。

【実施内容 ⑧配布】

配布に関しては、冊子作成終了時に、家庭訪問を行っている世帯が114世帯あったため、それらの世帯へ優先的に配布。またインタビューを行なった48名に配布。その後、クリニック・学校での啓発の際に配布。スタッフ総人数40人になるが、スタッフも1冊ずつ所持し、相談

対応時やファンドレイジング時に活用していくこととなった。当初予定していた活動協力者への配付は、地域ネットワークのミーティングの場で配布を行なった。

(3) 得られた教訓など：

エンパワメントのためのワークショップは、現地のファシリテーターやその他スタッフが話し合いながら内容を決めていった。その際に住民の声を聞きながら、様々なテーマをワークショップに導入していく柔軟さや、その決定までの判断の速さに、スタッフやボランティアの多くが地元住民であることの大切さと強み、アフリカ文化の柔軟さや勇気を感じさせられた。大枠は私達日本人のアイデアをたとえ使ったとしても、実践については、現地の人を信頼して任せることが重要であることを改めて認識した。

また、日常のあらゆる機会にワークショップのことをPRしてくれるスタッフもあり、頭が下がる思いであった。

(4) 今後の活動・フォローアップの方針：

冊子作成に関わってくれた相談者や参加者の、心理社会面の支援や社会参加の促進を今後も継続していく。また配布するだけでなく、冊子を手にした人の、再度の学業や就業への挑戦のための個別支援、ペアレントトレーニング、疾患や障がいの治療リハビリ等、社会資源につながる過程を支えていくことを通じて、コミュニティ住民の生活の質を底上げしていきたい。

またグループ討議の中で有益と感じられたテーマを参考にしながら、今後もセンターの事業としてワークショップを継続していきたい。

現在のところ、日々のエイズ孤児支援や家庭訪問・個別支援の他には、①ペアレントトレーニング、②様々な問題の被害者をなくしていくための啓発、③ドロップアウト防止の学校との連携（児童・生徒のソーシャルワーカーとしての役割を一部学校で任されている）、④ラーナシップ制度による職場体験先としての学生の受け入れ、⑤家庭暴力や虐待、犯罪等の加害者とならないための行動変容のスキル習得をめざすワークショップ、⑥HIV 感染予防や薬物乱用防止のための啓発、⑦センターの10代のエイズ孤児の自助グループ、⑧失業者のエンパワメントを目標としたワークショップが、1月以降の事業として予定されている。

3. その他(エピソード・感想・写真など)

(1) 活動中のエピソード・感想など

多言語の国でどの言語で冊子を作成するのか、また逼迫した人でも読みやすい文章にするにはどうすればよいか、活動事業を提案した段階では十分な検討ができていなかったと反省点である。しかしその分、事業を開始していく中で議論を行い、文字起こしをどうしていくか等、その都度立ち止まりながら、皆で解決していくことができた。通常の事業とは違った意見交換や価値観の共有ができたことは有意義であったと思う。

また人が語ることで得る治療効果について、大きな手応えを得ることができた。南アフリカでは口承文化の中で、国・民族そして家族・個人の物語、祈り等の信仰的なもの、歌や詩等が語り継がれ自

己表現がなされてきた。それに似た体験がインタビューやワークショップでなされたのかもしれない。また、この治療効果（カタルシス体験）は万国共通ではなかろうか。

(2) 活動の写真



ワークショップの様子



自分の体験を語る若者



ワークショップ後の様子



学び直しの学校



学校での体験授業の様子



冊子を確認しながらの話し合い

(3) JICA 基金活用事業を受託したことで団体の成長につながった点・良かった点

今後の長期にわたるプログラムを考えていくために有益な、コミュニティのニーズを把握することができました。一人の相談者に長い時間をかけ支援する時間を保障されたので、より丁寧なソーシャルワークを実施することもできました。当団体や現地のセチャバセンターは、助成額や期間ともに、今回の規模の活動を適宜ニーズに合わせて行なっていくことが今後の活動の長期継続のためにとっても大切だと思っているため、非常に感謝しています。